

博麗

Gather Ye Rosebuds While Ye May.

葬送

ふかい、ふかい霧の中。

並ぶ大人たちはただ無言で、だからわたしは、細い畦道を踏み外さないように足元ばかりを見ながら、引かれる手のままに、大人たちの後をついていくだけだった。

霧の中を、灯された明かりがゆらゆらと揺れて、りん、りん、と、列の先頭を行く鈴が鳴る。もうお昼に近いはずなのに、白く霞む視界は薄暗くなるばかりで、少し先をゆく背中もはつきりとは見えな。揃いの黒い服を着て、行列に参加してゐる大人たちは、どれもわたしの知らない顔ばかりで、だからそこに居るのが誰なのかも曖昧で。黙って俯いたままゆらゆらと先を進む黒い人影は、本当にそれが生きた人間なのかわからないくらいに不気味だった。

辺りには獣道の草いきれが立ち込めていて、じつとりとした霧と一緒に、濃密な森の匂いが息苦しいくらいに満ちてゐる。里の子供だつて近くの野原で遊ぶことはあるけれど、その気配とも全然違う、もつともつと、人が立ち入ることも許されないような、強くて濃く野辺のにおい。

普段は立ち入ってはいけないと言われていた場所へ、自分が踏み込んでしまったことを、強く感じさせた。

すこしだけ怖くなつて、繋いだ手を強く握る。

見上げれば、いつもとは違う黒い服を着たリンノスケは、そつとわたしのほうを見て、少しでも表情を緩めてくれた。いつもならここになにか一言あるのだけど、やつぱりリンノスケも黙つたまま

で。わたしは彼に手を引かれるまま、黙って黒い装いの行列に従う。

誰も無言の、足音と鈴の音だけが響く行列の中で、わたしはふと、わけもなく大声を上げて走りだしたい衝動にかられた。

でも。それはやつぱり思つてみただけで、わたしにそうすることはできなかった。

ちやうど幽霊やお化けの話を聞いたときに、大声を上げて歌いだしたくなるのと同じ。

それは勇気でもなんでもなくて、ただ、無茶苦茶にふるまふことで怖いのを誤魔化してしまおうとしているだけのことだ。

わたしにはリンノスケの手を振り払う意気地もなく、ただただ、この無言の行列が嫌くてたまらないだけだつた。

ふいに、静かに風が吹いた。

霧をゆつくりとかき混ぜる風は、生温く足元を撫でてゆき、わたしは鳥肌を覚えながらリンノスケとつないだ手をぎゅつと握りしめる。

りん、と響いていた鈴の音が、止まっていた。

かわりに響くのは、ずしん、ずしんという重い足音と、じゃあんじゃあんと五月蠅い銅鑼の音。

笛に太鼓に、まるでお祭りのようにやかましい鳴り物が、けれどとてんてはうばうにいくつもいくつも打ち鳴らされて、霧の中に響き渡る。

「――、――」

誰かが口を開いた。

あるいは、単に身じろぎをしたただけだつたのかもしれない。

波紋のように広がるざわめきの向こうに、わたしはぼんやりと浮かび上がるいくつもの影を見た。見上げるほどに大きな身体。赤ちやんよりも小さな身体。蛇のように長かったり、大きな羽が生えていたり、長い牙が生えていたり、太い角が生えていたり。たんぽぽの綿毛みたいに毛むくじやらだつたり、手足が何本も生えていたり、まるで枯れ枝みたいにやせ細つていたり、まんまるのお月さまみたいに太つていたり。

見たこともない姿形をしたものたちが、たくさん、たくさん、そろそろと列を組んで、騒々しく吠え騒ぎながら、こちらにやつてくる。

ぼんやりと灯つていた提灯の灯りが風にゆらめいて、炎が煽られ小さくなる。それがいつそう、霧の向こうに浮かび上がる異形の影を、歪なものに変えていた。

「勝つて嬉しい花一匁」

「負けて悔しい花一匁」

「隣の姐さんちよいと来てあくれ」

「鬼が怖くて行かない」

「御布団被つてちよいと来てあくれ」

「御布団ぼろぼろ行かない」

でたらめな調子に乗せて、歌声が響く。私も知つてゐる童歌だつたけれど、男とも女ともつかない、ひび割れたような声のそれは、まるで聞いたこともない異質なものに聞えた。

わたしは怖くなつて、リンノスケの背中にしがみつき、顔を伏せる。

「あの子が欲しい」

「あの子じゃ分かん」

「この子が欲しい」

「この子じゃ分かん」

「相談しよう、そうしよう」

これらの歌を遮るように、強く、りと鈴の音が鳴った。

途切れた歌に恐る恐る声を上げてみれば、ざわめく黒衣の列が自然と左右に割れ、その中から前に出てゆく姿がある。

——父様だ。

どういつ具合かわからなかつたけれど、隣に居るリンノスケの顔も分からなくらい深い霧の中で、

でもわたしはなぜか、その背中が父様だと見分けることができた。  
恐ろしい顔をした影達の前に、ゆつくりと父様が歩み出てゆく。  
わたしは、危ないとも叫ぶこともできないまま、リンノスケの脚にしがみついて、必死に震える足をこらえていた。

「――」  
「――」

二人が何を話しているのかは、わたしには聞こえなかった。あるいは、わたしには判らないことばで話していただけたかもしれない。父様が大事な商売のお話をしていてる時も、よくそんなふうに、難しげ言葉で長い間話しているのを、わたしは知っていた。

そうして。いつもの商売のお話よりはずっと短く、それは終わって。  
ずらり並んだ化け物たちは、そのままくると背中を向けて、来た時と同じように、唐突に霧の中へ消えていった。

なぜだろう、わたしはそれから目を反らすことができずにいたはずなのに。  
じつと、じつと。穴があくくらいに鋭く、リンノスケが父様を睨んでいたのを、覚えていてる。



## 幻想郷、第百××季。

夏も盛りを迎えようとする七月のある暑い日に、霊夢は死んだ。

思い返してみれば、私とあいつとは、これまでなんだかんだで長い付き合いになる。普段から、殺したって死なないような顔で、どんなこともふわりと受け流してきた、幻想郷の巫女。四六時中紅白の祝い事みたいなお目出度い恰好を続けていたくせに、本当に、まったく突然に。

なんの脈絡もなく、博麗霊夢は命を落とした。

これが、齢九十九まで生きて曾孫玄孫に囲まれての大往生だとか、幻想郷を揺るがす大異変に挑んての名誉の戦死だとか言うなら、いろいろと納得もいったことだろう。

あるいは、恨みがかつて誰かに殺されたとしても言うのなら。少しは、この疑念や困惑もおさまってくれるのかもしれない。あいつに限ってそんなことはまずないだろうが。

結局は、私自身、未だに霊夢の死を実感できずにいた。どこからか、あいつがふわりと顔を出して、どう、驚いた？ と種明かしをしてくれるのではないかと、そんな事はかり考えてしまう。

これは誰かの仕組んだ冗談で、こうして巫女の死に右往左往し、悲しみと困惑にくれてはいる私たちをこっそり覗き見て、ああ、まだ騙されてやがるのかこの間抜けめ、と。どこかで腹を抱えて笑っている奴がいるんじゃないかと。そう思えてならない。

……それがまつたく都合のいい想像だというのは、判つていても。

實際、靈夢の死を間近で目の当たりにした私でさえも、この集まってる連中も、何割かは同じような事を考えているだろう。

初めはなんの冗談かと思ひ、次はタチの悪い冗談だと笑ひ、その次は悪趣味なイタズラだと怒り、それからなお一刻ほど無駄な時間を経て、ようやく私は、形だけでもその事を理解した。前触れも、脈絡も、ろくな理由もないままに。

幻想を言祝ぐ博麗の巫女、博麗靈夢は、死んだのだ。



そして今、靈夢は。黒く装われた葬送の場の中、白く四角い匣の中に冷たく横たわっている。幻想郷の端の古びた神社には普段から参拝客などほとんどいなかったに、通夜に足を運ぶ人の数は後を絶たなかった。そのほとんどは私も見たことのない顔ばかりで、今更ながらに博麗の巫女という存在の大きさを思ひ知らされる。

夕前からの弔問客が、ようやく一区切りついたのは、夜もすっかり更けた頃だった。

通夜振る舞いの席の賑わいはやや増し、混沌の様相を呈していた。一見、いつもの宴会の雰囲気にも似て、けれどそこに漂うのは拭い去れない陰の気配。もう取り戻せない時間を悔むように、どこか自暴自棄な気配が満ちている。

ぼんやりとした頭のまま、騒がしい部屋の間で茶を飲んでいると、酒臭い息を吐きながら、小



さな身体がどかどかと駆け寄ってくる。

萃香は卓をひよんととび越え、私の隣に腰を下ろした。

「わえ、魔理沙。呑んでるかい」

「それどころじゃないぜ、忙しすぎてな」

「そいつは良くない。うん、良くないよ。ほう」

私の手を引くように無理矢理、大きな杯を押し付けて。萃香はそこに瓢箪がひっくり返るんじゃないかという勢いで酒を注ぐ。見る間に朱塗りの杯が溢れそうになるのを見て、私はあわてて萃香を制した。

「わかった、わかったぜ。後で付き合つてやるから、ちょいと待つてくれ。私が怠けてればそれだけ皆が困るんだぜ」

「……なんだい、こんな時だけ真面目な顔して。宴会じゃ口々に仕切りもできずに酔い潰れてる癖に」杯の縁に盛り上がった酒が、ぱたぱたと地面に零れる。

「今酔わないで、いつ酔うつてのさ」

ぼそりと呟いて、萃香はそのまま、突き出していた杯をぐいと自分て煽る。

ことのほか、霊夢を氣にいつていたこの酔いどれ小鬼も、最近はずよくちよく古馴染みの元や天界に出かけていたこともあり、霊夢が死んでいることを知つたのは私の後だったという。

一時はまるで妹か何かのように、神社に入り浸つていただけに、里の人間たちの覚えもよく、さきからあちこちで顔見知りと杯を重ねていたようだった。

萃香は空になった杯に再度酒をなみなみと注ぐと、騒がしく去つていった。置いてきぼりを食つ

た格好で、杯を持て余していた私のすぐ隣で、

「……良いご身分ですね。喪主はもう少し忙しいものと思えますが」

ふう、とわざとらしいほど大きく溜息をついて、阿求が私の隣に腰を下ろす。彼女もまたこの席に居る皆と同じように、黒の喪服を纏っていた。肩上で切り揃えられた髪は、いつもとは違う色合いの、目立たない藍の花飾りで留められている。

「悪かったな、無理に引っぱり出して」

「まったくです。か弱い乙女にあれこれと無茶ばかり。これで私も忙しい身なんですよ」

口を尖らせながら、年よりじみた仕草で肩を叩いてみせる阿求。ちうと振り返った先、貸本屋の看板娘が目元を赤くして卓の上に酔い潰れていた。

人里の歴史を振り返るときに、稗田家の影響は抜きにして語れない。私は彼女を通じること、霊夢の葬儀の準備を整えることができた。何年も前に家出をし、実家の面子を台無しにしたまま放蕩を続けている不良娘には、他に頼れる相手もいなかったからだ。

「いったい何度、あちうちちうと走り回らされたことか。寿命が3年は縮みましたよ」

「すまん。恩に着る」

どういう形であれ、博麗の巫女の葬儀となれば、里の一大事でもある。大結界が幻想郷に関わる大事なのは、里の有力者であれば理解していることだし、その他にも巫女は妖怪と人間との仲立ちをする役目を持つのだ。

本来は、それを取り仕切る役に、どこの誰とも知れない（ことになっている）野良魔法使いの小娘があさまっていること自体があかしい。その無理を通したのも、稗田の長として里の人々に信用

篤い阿礼乙女の口添えだった。

「色々と厭味も言われましたが、どうせこれで後ろ暗い思いをするのは魔理沙さんのほうでしょうから。あとで存分にツケを払わされる事になるのは覚悟しておくと良いですよ」

「……わかつてるさ」

吐息と共に萃香の残した杯に口を付け、強烈な酒精に顔をしかめる。喉が焼けるほどの鬼の酒だが、無理やり胃に流し込んでも頭が熱くなるばかりで、一向に酔えそうな気がしない。

「私も巫女の葬式に経文なんて、ちぐはぐだとは思わがな。断るようなことでもないだろう。命蓮寺の檀家になれつてこともないし、里じゃあうちの方が馴染む連中が多いだろうっしな」

素直に言えば、少しでも後ろ盾が欲しかったというのが本音だ。はぐれ者同然の魔法使いの小娘が、里の助力を拒むような形で葬儀を行う以上、どうしても権威付けのようなものが必要だったのだ。妖怪と人の共存を訴える白蓮たちの申し出は、まさに渡りに船だった。

小娘の浅知恵だが、阿求も知っていて何も言わずにいてくれるのが、ありがたかった。

「一部始終見せて頂きましたが、随分と手際が良いこと。伊達に白黒ではないと言ったことですね。私の葬儀の時もお願ひしようかしら」

あまり笑えない冗句に曖昧な笑みを返す。いくら白黒だからって鯨幕扱いは酷い話だ。

「見様見真似だぜ。……それなりに何度も見てきたからな。それに、宴会の幹事なら慣れてる」

「魔理沙、ちよつと来てくれ」

「そう、お呼びだ」

玄関からの声に跳ね起きて廊下に出れば、慧音が待っていた。

「あちらは大体片付いた」

こちらも髪をまとめ、喪服なのは変わらなかつたが、いつもの帽子が無けりて随分と印象が変わつて見える。他の連中と大差ない格好だというのに、やけに艶っぽく見えてしまうのは、不思議なところだつたか。

「後の区切りは世話役に任せる。私は寺の皆さんをお見送りするよ」

「悪いな」

「なに、困つた時はお互い様だ。……ああ、あと咲夜が探していたぞ」

「……またそろ面倒事か？」

ついさつき、焼香に詰め掛けた妖精たちがひと騒ぎ起し、それを追い払うのに手を焼いたばかりだ。思わず顔をしかめてしまう私に、慧音も苦笑いを浮かべて、

「そういうものだ、こういう場合はな。では行つてくる」

そう言い残して、慧音は部屋を後に、白蓮達を見送りに去つていつた。いつのまにか、隣には阿求がやつてきていて、

「慧音さんはじつに人の出来た方ですね。あれだけ扱き使われて文句ひとつ言わない」

「誓つて言うが、押し付けてるわけじゃないぜ」

「分かつています。……彼女なりに喪に服してゐるのでしょうね」

人里の守護者として、里に最も近い場所でも多くの時間を生きてきた慧音は、それだけ多くの死を看取つてきたといふことでもあるんだらう。寺子屋を営んでゐる彼女からしてみれば、産まれたばかりの赤子も里の長老も、そろつて教え子のようなものかもしれない。

「……こんなところに居たの」

などと話しているうち、すぐ目の前に銀髪のメイドが姿を現す。こちらも目立たぬ黒を装つて、メイドっぽさは6割減。咲夜は不満そうな表情で腰に手を当て、私の顔を覗きこんでくる。

「手が足りなくて困っているんだけど」

「お前に限つてそれはないだろう」

「普段から何から何まで一人てやつてるといつ訳じやないのよ?」

ぶつぶつと文句を言いながら、手を止めることなくテールを片つけてゆく。さすがにその手際は見事なものだ。いつもは先に酔いつぶれて見ていないが、妖夢と一緒にいつも宴会の片付けを押し付けられるだけのことはある。

「貴方の手伝いをするようにと命じられてはいるけれど、貴方に敬意を払う必要はないてしよ?」

「現金なもんだ」

咲夜は、一昨日から諸々の準備を手伝つてくれた。紅魔館の尊大な吸血鬼は、まるではじめから霊夢の死を理解していたみたいに、訃報を持つて訪れた私にただ一言、そう、とだけ呟いて、咲夜に五日の暇を出した。

屋敷で一番有能なメイドを貸し出してくれるというのが、あの永遠に紅く幼い吸血鬼なりの計らいというやつなのだろうか。疑問には思つたが、従者は黙して語らない。

「こつちはずもういいぜ。どうせほつといたら一晩中呑んでいるような連中だ。適当にやらせとけ」

宴席場の真ん中では、へべれけになつた早苗が演説を始めている。グラスを握りしめ、ふらふら左右に揺れながら、たとえば霊夢がいなくとも、幻想郷の平和は私が立派に守つてみせると叫ぶ守

矢の風祝に、野次とまばらな拍手が飛んでいた。

「……あまり気分のいいものでは無いわね。いつもは親しげにしているくせに、こういう時だけは顔も見せないなんて」

実にはつきりと不快感を口にしていた。紅の館のメイドは再び姿を消した。いつものまにか卓の上は綺麗に片付き、座布団もきつちりと揃えられている。

「……珍しく、饒舌ですわ」

「かなり酒が入ってるな、あれは」

咲夜の言っていたのは、白玉楼や彼岸の連中のことだろう。宴会とあれば真つ先にやってくる桜の亡霊も、その従者も。お説教好きの閻魔も、いつも理由もなく里の店先でサボタージュを決め込む死神でさえ、この場に顔を見せようとはしなかった。

それが、この幻想郷において侵してはならない生死の境界だとしても、言うように。

目の前の光景が、嘘やお芝居では無いのだと思ひ知らされ、胸の奥が小さな憤りにぎわつく。

「それにしても」

私の不機嫌を感じ取ったか。ぽつりと言い、阿求は隣の卓から徳利と猪口を引き寄せた。

「……まさか、私が見送る側になるとは思っていませんでしたよ」

阿礼乙女は代々短命であり、三十とは生きられないと言われている。その生涯の大半を幻想郷縁起の編纂と、転生への準備に費やすのだ。時代の御阿礼としての転生が約束されているとはいえ、こんな形で霊夢と別れるとは、想像もしていなかったのだろう。

「同じことを、ここに居る全員が思っているさ」

人の価値とは、その死にあつて、どれだけ多くの者がそれを悼み、悲しんでくれるかで決まるといふ。里からも離れた結界の端にある神社には、妖怪がうろつくほかは閑古鳥が鳴いてばかりだつたといつのに、この賑わいを見れば少しは靈夢も留飲を下げるだろうか。

「私じゃあ、こつはいかんだろうな」

「……さぞ形見分けが騒がしいことでしょうね。……いえ、借物の取り立てかもしれません」

「酷い言われようだぜ」

呆れながら、私も酒精を喉奥に流し込む。伊吹瓢を二合も空けたのに、酔いはちつとも回つてこず、頭の芯が重く澱んでゐるようだ。

「魔理沙」

足音に顔を上げれば、やつてくるのは永遠亭の兎が二匹。

迷いの竹林奥に居を構える彼女達が靈夢のことを知つたのは、かなり後になつてからのことだつたらしい。医者なんかとは無縁の空を飛ぶ巫女だつたが、それでも薬師としていくらか思うところがあつたのか。月の頭脳は弟子二人に弔問を命じたという。

輝夜からはやけに多い香典と共に、非礼を詫ひる書状があつた。通り一遍のお悔やみを述べ、葬儀に出席できない旨をしたためた素つ気ない内容には腹が立ちもしたが、落ち着いて考えてみればそれも当然のことだ。

死を悼む場に不老不死の蓬莱人が顔を出したところで、良いことなと一つもないのだから。

「そろそろ私達はお暇するわ。明日も仕事があるし」

「そつかい。……永琳にもよろしくな。あと輝夜にも」

まるで付け足しのように月の姫君の名前を呼んでも、二人はそれを咎めるでもない。ええ、とだけ答えて、鈴仙が小さくうなずく。

別れ際、やけに神妙な顔をして、悪戯兔がじつとこちらの顔を見つめていた。

「……魔理沙」

「ん、なんだ？」

「あんたは長生きしなね。霊夢の分まで」

おそろく、ずつとずつと長い時を生きてきた彼女の視線。それがなぜか重く感じられ、帽子のつばを引き下げようとした指が空を搔いた。

がらがらと閉まる戸の前で、なにもできなまま空虚な闇の奥を見つめていると、宴席場の隅で、片腕の仙人と向かい合っていたやつが腰を上げる。

「では、そろそろ僕も失礼させて貰おうか」

「待てよ香霖。身内は残つて飲み明かすのが礼儀だぜ？」

「一応は僕も客商売なんぞね。霧雨の親父さんの手前、公然とこの場に居るのも問題だろう」  
「私への配慮のつもりか？ 今更だぜ」

どうせあとで割りを食うのは私だ。そんなことで文句なんか言わせるものが。

が、香霖は静かに首を振る。

「どの道避けられない事だよ。ここに居るといふ事は、自分の立ち位置を明確にするという意味もあるさ。公的私的、どちらの面でも、僕には具合が悪い」

それだけ言うと、香霖は私の制止を振り解いて、さつさと席を立つてしまふ。



「なんだ、あいつ」

素つ気ない背中を見て憤慨していた私が、香霖の意図を知ることになるのは、それからしばらく過ぎてのことだった。



やがて静かに夜が更けて。

時刻はすでに丑三つ時。がらんとした式場の中に、揺れる蠟燭と、煙を立ち上らせる線香の灯が壁に陰影を揺らめかせる。ずつと五月蠅かった宴席場の嬌声も遠く、いまはただ静寂。

棺にあさままつた博麗の巫女の前に座り、私はまんじりともせず夜通しの番を送っていた。

空模様は悪いようだった。通夜の間も風が窓を震わせていたが、やがて曇り空はとうとう限界を迎えたように、屋根をぽつ、ぽつと雨音が叩き始める。

「――雨か」

朝までに止んでくれればいいな、と呟きかけたとき。

きい、きい、きい、きい、

耳が軋む車の音をとらえる。風に揺れる窓と、強まる雨音に紛れながら。幽かな音を引きずり、何かが遠くから近付いてくる。思わず腰を上げかけたと同時に、吹き込んだ風が蠟燭を吹き消した。突如として暗闇に満ちた部屋の中に、ぽ、ぽと青白い炎が灯る。

きい、きい、……きい。

ゆつくりと、車の音が停まる。

がたりと押し開かれた扉の向こう。深く、闇のような緑を纏う妖怪の、赤い目玉がぎらぎらと輝いていた。

地底の火車は、その手に猫車を押しながら、ずぶぬれになるのも構わずにこちらを凝視している。「なんだよ。焼香にやちよつと遅すぎるぜ」

この地霊殿の。ペットもまた、霊夢に懐いていた妖怪だ。

けれど私の問いには答えず、赤毛の火車、火焰猫燐は泥まみれの脚で部屋に上がり込んでくる。きい、きいと寂ついた猫車の耳障りな音が、私の神経をささくれ立たせた。

「……ちよつとお喋りつて気分じゃなんだ。早く帰れ」

それにも答えず、燐はじつと、じつと私を、いや——私の背中、霊夢の眠る匣を凝視していた。吹き込む風雨にたちまち濡れる床の上、鬼火が激しくあたりを飛び回る。

「ねえ、魔理沙」

「出て行け」

熱を帯びた火車と、強張る私と。声が重なる。

きい、きいと揺れる猫車が、すぐ目の前にまで近づいていた。死体を運ぶ火車の車輪が——私の放った星弾の輝きに弾かれて、動きを停める。

「出て行け。今は冗談でも、お前の顔は見たくないぜ」

「——つれないねえ」

くすくす。喉の奥で、堪え切れない愉悦を漏らすように、火車が鳴く。

蕩けるように恍惚の笑顔で、両頬を押さへ。牙を覗かせるように、口元を歪めて。

「あたいは、とつても、お姉さんのことを気に入ってたんだよ。ずっと、ずっと、この日が来るのを待つて、待つて、待ち焦がれてたのさ。こうして、お姉さんを運べる日をねえ」

「出て行けッ！」

限界だった。構わず撃ち出した全力のレーザーが、戸口を薙ぎ払う。

放った弾幕の熱量が蠟燭に着火、火を灯すと同時、収束する閃光に貫かれた猫車が鉄屑と化して地に転がる。その頃には彼女の姿は黒い二尾の猫に変じて、戸袋の上にあつた。

「残念だねえ。さつぱり、旧地獄の炉で燃やしちまうたほうが、後腐れもなくてずっとマシだと思っただけだねえ。きつとすぐいい具合に燃えるだろうに。灰まで残さず、真っ赤にさ……」

くすくすと、笑い声をあとに残し。黒猫は闇の奥に消えてゆく。

息を荒げる私を嘲笑うように、青白い鬼火はゆうゆうと、名残惜しそうになおも棺の周りを飛び回っていた。



「……ん……」

いつの間にか、うとうととしていたらしい。窓の外はまだ真つ暗闇。甘ったるい匂いに頭の芯がぼうと霞む。

嫌な事があつた後だ、警戒を強めていたはずなのに、いつのまにか張り詰めていた気が緩んてい

たらしかつた。全身を鉛のような疲労感が包み、頭の奥が鈍く痛む。

(そういや、あんまり寝てなかつたな)

欠伸を噛み殺し、目を擦つてしばし。

蠟燭の炎に薄く照らされるそれを、最初、私は脅威だと認識できなかった。

——すぐ目の前の床に突き出した、細い、鑿。

くるんと弧を描いたその刃先が、床に大きな円を描く。ぽかりと冗談のように大きな穴をあけた床の中から、死幽の美を纏う女がするりと這い出してきた。

辺りに漂う甘つたるい匂いが増す。喉奥に感じる吐き気を堪え、口元を覆つて息を押さえた。

「……今度は、お前か」

「あら、気付かれちゃった？　特製の丹藥なのに」

壁抜けの邪仙、霍青娥はあつけうかんと答えた。鑿を髪に戻し、真鍮の煙管を口元へ。代赭色の煙が漂い、濃密な匂いが立ちこめる。

「毒にはちつとばかり強くてな。……墓暴きならもうとくい場所があるぜ。教えてやろうか？」

「結構ですわ。私が欲しいのは凡百の死体じやないの。死んで三日目。七魂天に帰り、三魄地に留まれば、以つて鬼と成り殭屍と成る。まさに、今日が絶好のタイミングなのよね」

邪仙が頬に手を当てる溜息をつくとき、だんと床板を吹き飛ばし、邪仙の使役するキョシシーが姿を現した。以前の様子とはずいぶん異なり、額に札を張られた顔は青白く淀み、動きも油が切れたかのようにならずに。左腕は腐り落ち、顎は外れ、黄土色の舌がだらしなく垂れ下っている。抜けかけた髪の毛、左右の眼窩はばかりと空虚な穴になっていた。

「このところ、芳香の調子が良くなってね。補修の材料を探していたのよ。……ああ、大丈夫よ。余ったところはちゃんとあなたに返してあげるから。お墓に入れるならそれで十分でしょう?」

キョンシーの折れた首を愛おしそうに抱え込み、邪仙はくすりと目を細めた。

「ああ、それとも、あなたがその子をキョンシーにしてみろ? やり方は教えてあげるわ。簡単よ」

「——ッ」

倫理と。常識と。

人の道理にところ構わず穴を突き穿とうとする邪仙。甘ったるく脳に染み込んでくる囁きを振り払い、青娥の胸倉を掴み上げる。

「うんざりだ。もつてういっつのは十分だぜ。出て行け」

「——あらあら。嫌われたかしら」

自覚のない言葉と共に、邪仙は再び鑿を一閃。壁に空いた穴へすると身を潜らせていった。息を荒げ、それを見送る私の前で。穴の中から白い手だけが飛び出して、ちよんちよんと私の背後を指差す。

「そんなに大事なら、目を離してはダメよ」

途端。膨らむ闇に、視界が塗りつぶされた。

深夜の式場を照らしていた、わずかな明かりが残らず掻き消える。

「……くそ、何だよ次は……」

上も下も解らなくなつた闇の中で、私はポケットの丹藥を弾いて魔法の明かりを灯す。そつして、わだかまる闇の奥。

安置された霊夢の棺のすぐ隣で、ぼり、ぼり、と嫌な音が聞こえた。

私に背を向け、蹲って何かを齧る、赤いリボンと金髪。返り血を飲み込む真つ黒な服が揺れ、固く粘ついた何かを一心不乱に噛み砕き、飲み込んでいる。

「——おい」

「んー？」

けふ、と満足げにおなかをさすりながら。

宵闇の人食い妖怪は、口元から肉片と骨をはみ出させ、こちらを向いた。

——あたまが、

まつしろになつた。



「つ……、」

「——酷いなあ、いきなり」

構えた八卦炉がぷすぷすと煙を上げる。閃光に撃ち抜かれた扉が炭化し、吹き込む雨にじゅうじゅうと焦げ音を響かせる。

息を荒げる私の前で、半分だけになつた顔に幼い怒りを覗かせ、闇妖が口を尖らせる。えぐり取られた断面からは、じわじわと闇が吹き出し、周囲に広がっては光を呑みこんでゆく。

つまみ食いを咎められたような顔で、ルーミアは不満げだ。

「冗談なのに。死体なんか食へないよ。怖がらない獲物は美味しくないんだよねえ」

「……時と場所を考えろ」

幸いなことに（と言うべきなのかどうか）、棺の中の霊夢の身体は無事だった。腰が崩れ落ちそうになる安堵と共に、気持ちの悪い首元の汗をぬぐう。

閻妖の言葉を信用するならば、今日の狩りは思つたよりもずつとうまく行つたというところらしい。おなかも膨れ、上機嫌で獲物をふら下げたルーミアは、霊夢の葬儀に顔を出そうと思つたという。

彼女が食んでいるのがこの哀れな犠牲者なのかというのは、この際どうでもいいことだ。

「ねえ、じゃあ、あなたは食へてもいい人類？」

「他を当たつてくれ」

絞り出した声に。特に返事はないまま、閻妖の気配は消えてゆく。

朝はまだ遠かつたけれど。もう、蠟燭を灯し直す気力は残つていなかった。



霊夢の遺体は、野辺送りにすることが決まつた。

知つての通り霊夢には身寄りもないし、まさか博麗神社に埋めるわけにもいかない。葬儀を行つた白蓮は、埋葬も寺の墓地にと強く勧めたが、神子の横槍が入つてそれは阻止された。といつて早苗のところに頼むのは二人とも強く反対したため、それらの折衷案という形で私が強引に話を

終わらせた形になる。

親父を含め、里の長たちから五月蠅いことを言われるかと覚悟していたが、拍子抜けするほどになにもなかった。噂では、里ではすでに次代の博麗の巫女に誰を据えるかの寄り合いが持たれてゐる最中だと言つ。彼らにとつて巫女というのは、厄介な妖怪を退治して、大結界の要でありさえすれば良く、死んだ巫女などに価値は無いのだろう。

葬儀の日は、朝から、やけに深い霧の出る日だった。

薄いウェールを幾重にも重ねたような、しつとりと身体を濡らすほどの霧は、まるでミルクを撒いたように里の外を覆ひ隠している。紅い霧であればレミリアのことを疑ひもしただろうが、この霧はあそろく違う咲夜がなにも言わない事もそれを支持していた。

棺の中、いつもの巫女服に着替えさせられた霊夢に最期の別れを告げる。死装束にしては派手すぎるが、幻想郷の不思議な巫女には、きつとこれが一番似合うというのが皆の意見だった。

りい……ん。

出発を告げる鈴の音を響かせ、昼をまわる前に、葬列は里を発つた。

先導を務めるのは二胡を手にした里の花屋。供物を持つ咲夜がその後ろ。喪主がわりの世話役を務める私と、導師代役の阿求。霊夢を乗せた棺を引く萃香に、天蓋を持つのは針妙丸。里の有志がそれに続く。慧音はどうしても都合がつかないと参加を辞退していった。

葬列が向かうのは里の西に広がる野原。かつて多くの死者が見送られた場所である。



そこで霊夢も茶毘に付されるのだ。

黒に装う葬列が、里を発つてしばらくすると、霧はますます深さを増し、やがて密やかな霧雨が降り始めた。蟬や小鳥の囀りもなく、霞む景色は静寂の中。ただ、薄く引き延ばされたノイズのような雨音だけが響く。

澄んだ鐘の音を響かせて、無言の葬列はその中を進む。

りい……ん。

白霧の奥へと向かう、かすかな鈴の音は、幽幻の誘い。

里を離れ、雨にぬかるむ田の畦道を抜け、草いきれの立ち込めるけもの道へと分け入って。

りい……ん。りい……ん。

鈴を手には葬列の先頭を歩く私は、いつだったかの——遠い記憶を思い出していた。

まだ小さかった頃の自分が、訳も分からず連れて行かれた、野辺送りの光景を。

あれは。——そう、あれは。

思考が物思いに沈みかけたとき。ふいに、先頭を行く隣が驚きの声を上げた。

ぼ、ぼ、と見えないう灯籠が立ち並ぶかのごとく、小さな明かりが行く手に灯る。深い霧に白く霞む森の向こうに、いくつもの。歪な影が浮かび上がった。深い霧に白く

その先頭を歩くのは、足元に無数の茨と草花を引き摺り、傘を揺らす夢と花の妖怪。

「勝つて嬉しい花一匁」

「負けて悔しい花一匁」

澄んだ歌声に、いくつもの声が答える。てんてばらばらに笛を、太鼓を、銅鑼を鳴らして。異形異様の百鬼夜行が、霧の向こうから姿を現した。

「隣の姐さんちよいと来ておくれ」

「鬼が怖くて行かない」

耳まで裂けた大きな口、羽根を広げて鳴き謡う姿、蝶を引きつれた黒いマント。片腕巨軀の鬼、長く伸びて揺れる首。ふわふわ宙を舞う亡霊に、刀を手にしたその従者。見覚えのある姿もちらほら見えるが、同時に見たこともないような異様な形相の妖怪たちも、多く混じっていた。

彼らに囲まれて歩くのは、紫に塗られた鬼の面を被る——八卦を刻む白いドレス姿。黒に沈む

葬列を、あざ笑うかのように艶やかで美しい白の装いの妖怪。

その左右には、同じように化生の面を被り、着飾った双尾の猫又と、九尾の狐を引き連れて。妖怪たちを束ねる賢者が、巫女の死を寿ぎに訪れる。

「あの子が欲しい」

「あの子じゃ分かん」

「この子が欲しい」

「この子じゃ分かん」

「相談しよう、そうしよう」

りん、と鈴音が止まる。

大きな傘をゆるりと掲げて、紫面を被った妖怪は歩みを停めた。

「今日、この日は」

「博麗の死す日」

「まっことめでたき日」

「妖怪を害する」

「巫女の死す日」

「まこと喜はしき日」

——ああ。

私は思い出していた。母様の死んだ日のことを。里の大店の娘でありながら、魔法に心を奪われ、命を落とした母様の葬列を。

あの時。野辺送りにされる母様の棺を取り囲み、彼らは今日と同じことを口にした。その棺の中身は、人ではなく、我らの同胞であるのだと。

だから、妖怪として弔わねばならぬ、と。

あの場に居た私は、ほんの三歳かそこらの女の子で。そのとき何が起きているのかも、何の意味があつたのかも理解していなかった。

あの葬列が、自分の母親のものであつたことすら、分かつていなかったくらいだから。

——父様は、

妖怪になつてしまふくらい、妖怪が仲間に迎えに来るくらいに、魔法に深く傾倒していた母様を、ただの人として。自分の妻として。霧雨魔理沙の母として、弔った。

そういつことだ。

「……霊夢を、迎えにきたのか」

紫面の妖怪が頷く。霊夢を、人ではなく、妖怪たちのやり方で弔う。彼らはそう要求していた。人と妖怪の間に立ち、その仲立ちをした博麗の巫女。

彼女は人間であると同時に、それとただ、妖怪でもある。それが彼らの言い分だった。だからって、私は。それにはいと領いてしまえるわけがない。

「不羈奔放の鬼よ。貴方は、どちら側でいいのかしら」

「鬼は、人との約束を守るさ。霊夢は私が惚れた相手だ。お前なんかに渡すものか」  
妖怪の問いに、萃香は、真剣な目でそれに応じる。

「紅の従者よ。貴方の主は、納得してゐるのかしら」

「お嬢様が決めになったこと。従者が主人の意志をみだりに口にするのは、許されせんわ」  
咲夜は、刃のように鋭い意志で、妖怪の言葉を切り捨てた。

人の葬列と、百鬼夜行。もの言わぬ博麗の巫女を挟んで、ふたつの境界が対立する。

「……そうか」

——香霖のやつが言っていたのは、これだ。

死んだ人間の価値は、それを悼み集まる者たちによつて決まる。

人が妖怪であるか否かも同じ。この境界のどちらに居るかが、己の立場を決めるのだ。

半分が妖怪の香霖は、だからあの場に残ろうとしなかった。慧音のように、里で生きることを選ばなかったからこそ、なあさうに。

人間のやり方で霊夢を弔おうとする、私の側に立つわけにはいかなかったんだ。

「……なんだよ」

この幻想郷で。この、東の果ての楽園の、空を飛ぶ不思議な巫女を。  
なにものからも自由だったはずのあいつを。

いまや、どいつもこいつも、誰も彼もが寄って集って自分の元に縛り付けようとする。

皆が憧れ、焦かれ、魅せられた博麗霊夢は。

もつ、二度と空を飛ばないから。

（——そうか、これが）

これが、死ぬということなのだ。私はようやく理解した。

だから。やるべきことなんて決まっていたのだ。

一触即発の空気を引き裂いて。深い霧を、垂れこめた雲を吹き飛ばし。閃光が空を穿つ。

掲げた八卦炉を、皆に見えるように示して。渦巻く気流の中、私は霊車に駆け寄り、萃香を押しつけて棺を蹴りあげた。四角い匣に横たえられていた霊夢の亡骸を抱き上げる。

事切れた霊夢の身体は、とてももなく軽かった。

「どいつもこいつもお断りだ。邪魔をするな。霊夢は私が弔う。そう決めたんだ。そこをどけ」

静かに。葬列の前に歩み出た私は、呼び出した箒に飛び乗る。ざわつく妖怪たちと葬列の面々を、八卦炉で威嚇。巻き上がる風の中、前髪を押さえる阿礼乙女に声をかける。

「なあ、阿求」

「……なんてす？」

「お前さ、知ってて言わなかったらどう？」

「……………」

小さな吐息が、肯定を示していた。

「言っていたとして、魔理沙さんはそれで思いとどまりましたか？」

「違いないな」

苦笑をひとつ。

握り締めた箒にありつただけの魔力を流し、飛翔。追いつかろうとする葬列を。飛ひかかってくる妖怪たちを、構わず全員振り払うて、最高速で入るを発動。

彗星「ブレイジングスター」

——向かう先は、まっすぐに、空。



激しい気流と、薄い酸素と。尽きかけた魔力と、朦朧とした意識。

私と霊夢を乗せた箒は、星の世界にいた。

他には誰もない。ただ空は無音。はたらくスカートを押さえるのも忘れて、ひたすらに空を征く。

遠く、うつすらと弧を描く地平線。雲のはるか上から見下ろす青く輝く地上。見上げた空は夜のように黒々とわだかまり、そこには全天を埋め尽くす、無数の星々があった。

「——なあ」

冷たくなった霊夢の手をとって。私は彼女に語りかける。

「おまえがずっと一人で見えたのは、こんな空だったのか？」

返事はない。そのかわりに紅白の巫女装束が、大きく、一度だけ気流に揺れた。まるで金魚鉢の琉金だ。まったく、死んでからも相変わらずお目出度いやつだと、思わず苦笑かこぼれる。

「いつだったかは、結界にぶつかって酷い目に遭ったんだっけな」

空が飛べるようになってすぐのことだったか。懐かしい記憶だ。

白黒と、紅白と。私と霊夢は、いつも面白いくらいに噛み合わなかったけれど。

弾幕に、異変に。空の上では、いつも、一緒だったように思う。

「……今度はあ前の番な。飯とか色々」

軽い霊夢の身体を、離してしまわぬようにきつく抱きしめて。

遙か空の果てを目指し、残る魔力のすべてを箒に注ぎ込んだ。



その日。

幻想郷の東の夜空を、寄り添うように流れ落ちる二筋の流星があつたことを、九代目阿礼乙女の日記は簡素に記している。

霧雨魔理沙の消息は、これ以降掴めていない。



【奥付】

「博麗葬送」

初版 平成28年1月24日

恋のまほうは魔理沙におまかせ！ 7

オルハザカサンバンチ

発行 折葉坂三番地

(<http://oruhazaka.dojin.com/infoblog/>)

あかがねおりは

著者：銅 折葉

※本作は「上海アリス幻楽団」様の  
「東方 project」の二次創作です。



東方 project Fanbook  
折葉坂三番地